

北欧 福祉と教育 街歩き

⑤学ぶこと はたらくこと

蘭部英夫=文・写真



by Kinbe & Ryo

メモ(5)

スウェーデン
人口920万人

首都=ストックホルム(80万人)

障害者は人口の15.7%。特別なニーズがあり特別な支援を必要とする人という広義な概念。

社会的就労5万人、政府持株100%会社の「サムハル」に約2~3万人、他はデイケアセンターなどで活動しているという。

ストックホルム市のシェアーホルメン地区にある高校を訪ねた。肢体不自由の子らが学んでいるというその学校は、4つの高校が建つ一つの敷地内にあった。

目的の障害児の高校(Björns Gymnasiet)は、国立で学生寮もある。他の3つは市立で、演劇やダンスを学ぶ芸術高校、自動車整備を学ぶ工業高校、外国語を学ぶ国際高校だという。玄関とロビー、食堂、図書館は共有している。国際高校の外国語の授業を受ける障害児もいるそう。

スウェーデンでは「場の統合」といわれた「インテグレーション(統合教育)」は、こういう形でも実践されている。



【上】 レストラン(デイケアセンター)の厨房で

【下】 工場跡を素敵に改造したレストランは労働者に人気



【上】 じゃがいもの総合学習中(市立リンデバークン高校)

【下】 肢体不自由児の特別高校は芸術、工業、外国語高校と統合されていた。現地の高校生たちと

「レストランにとりくむデイケアセンターは全国に広がっています。かつてロックバンドの演奏活動がトレンドのときがあったが、食事はいつでも必要なことだからね」とスタッフ。

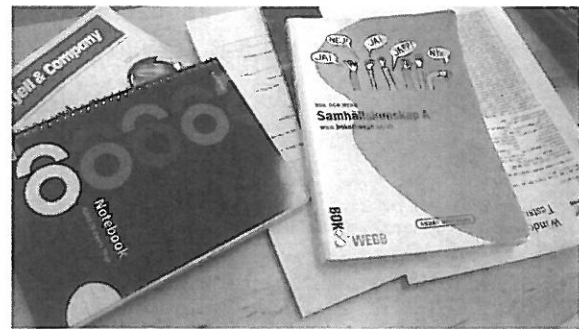
厨房では、卒業生たちが、じつに一生懸命で、楽しそうに働いている。

「高校で、レストランのことや手作業などを学び、私はなんにもできないのではなく、私はニンジンがむける。ジャガイモの皮がむける。タマゴの殻を割れる。だから、あなたがいないとニンジンが、ジャガイモが、タマゴがお客さんに出せないよね」

「そんな体験から、自信と責任感が生まれ、喜びが感じられるのではないのでしょうか」と施設長が言う。

*

自分たちの仕事がお客さんを喜ばせ、感謝される。みんなで調理したり、接客できるのは楽しい。生活の基本は障害者年金だ。同年齢の市民と同じ程度の所得がある。だから税も納める。地元でと



教室でみた教材

れた新鮮な食材を使い、ゴミや残りのものはバイオガスになるようにエコ処理を徹底する。11時をまわると、地域の会社の労働者たちの長い行列ができていた。

*

初代全障研委員長の中村昌人さんが、滋賀のあざみ寮・もみじ寮の寮生劇の実践につきのようなコメントを寄せていた。

「人間は発達していく上で自分を変えていく力を生み出していくわけです。これまで乗り越えるこ

とのできなかったことを成し遂げ、新鮮な気持ちの流れをつくっていく、そのことを通じて、改めて自分をとらえ直し、内面を豊かにしていくパイパスをつくる。

このパイパスをもつことによって、手をつないで育ちあう自制心が育つ。

人は、学びはたらき、そして手をつないで育ちあうのだ。

(注) 積極的差別は正措置

「アファーマティブ・アクション」。障害者権利条約の「理にかなった条件整備」としての「合理的配慮(リーズナブル・アコモデーション)」とともに、障害者の「マイナスイメージ」を社会的支援により「ゼロ」とするための積極的な特別措置のこと。

ストックホルム市では知的障害児の場合、高校は希望があれば2年間の延長も可能。教育はすべて無償。

【参考文献】

社会福祉法人大木会編『ロビンフットたちの青春——ある知的障がい者施設・30周年の演劇実践記録』中川書店